

みつゐ 三ツ井遺跡

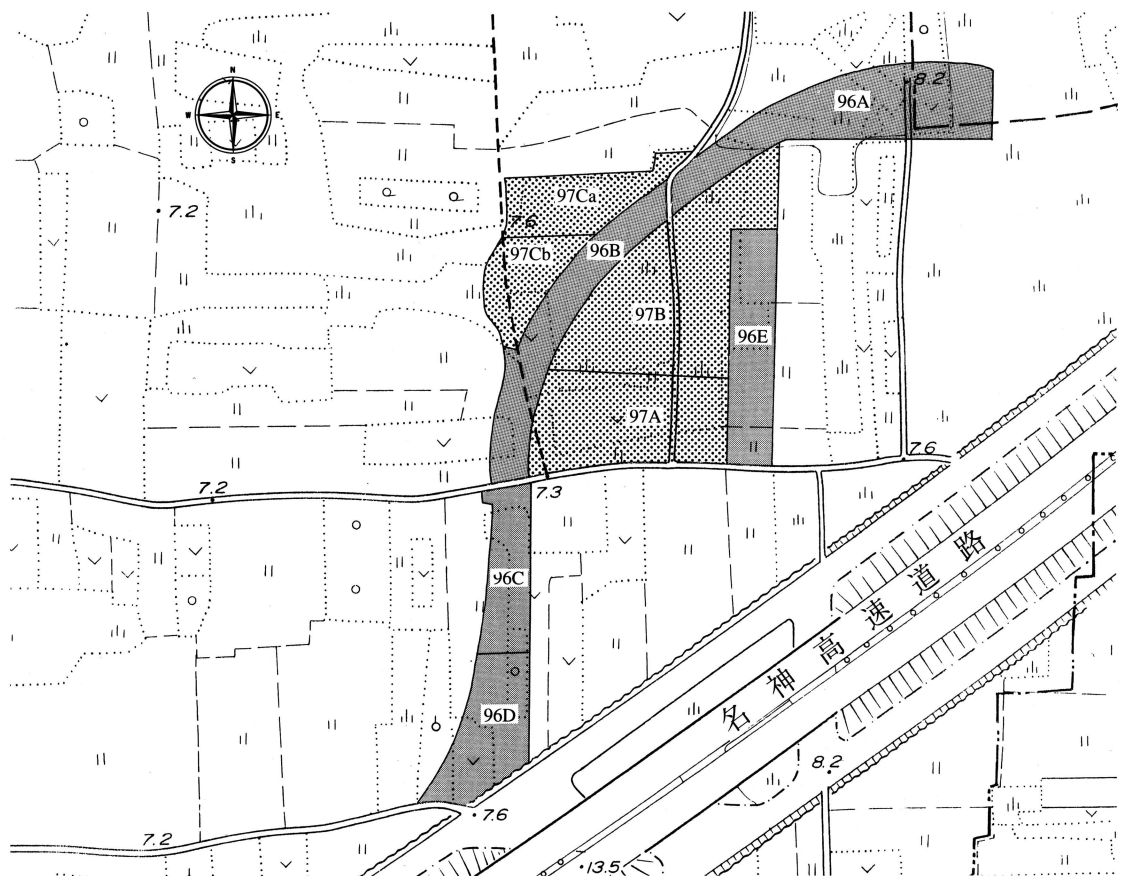
調査の経過 三ツ井遺跡は、青木川と五条川に挟まれ、水田と畑地の交錯する島畑景観を良好に留めている一宮市丹陽町三ツ井に所在し、標高8m前後の自然堤防と後背湿地上に展開する。発掘調査は、名神高速道路上り線一宮パーキングエリア建設に伴う事前調査であり、日本道路公団より愛知県教育委員会を通じた委託事業として平成8年度から実施している。

平成9年度はA・B・C a・C b区合わせて5,977㎡を発掘調査した。

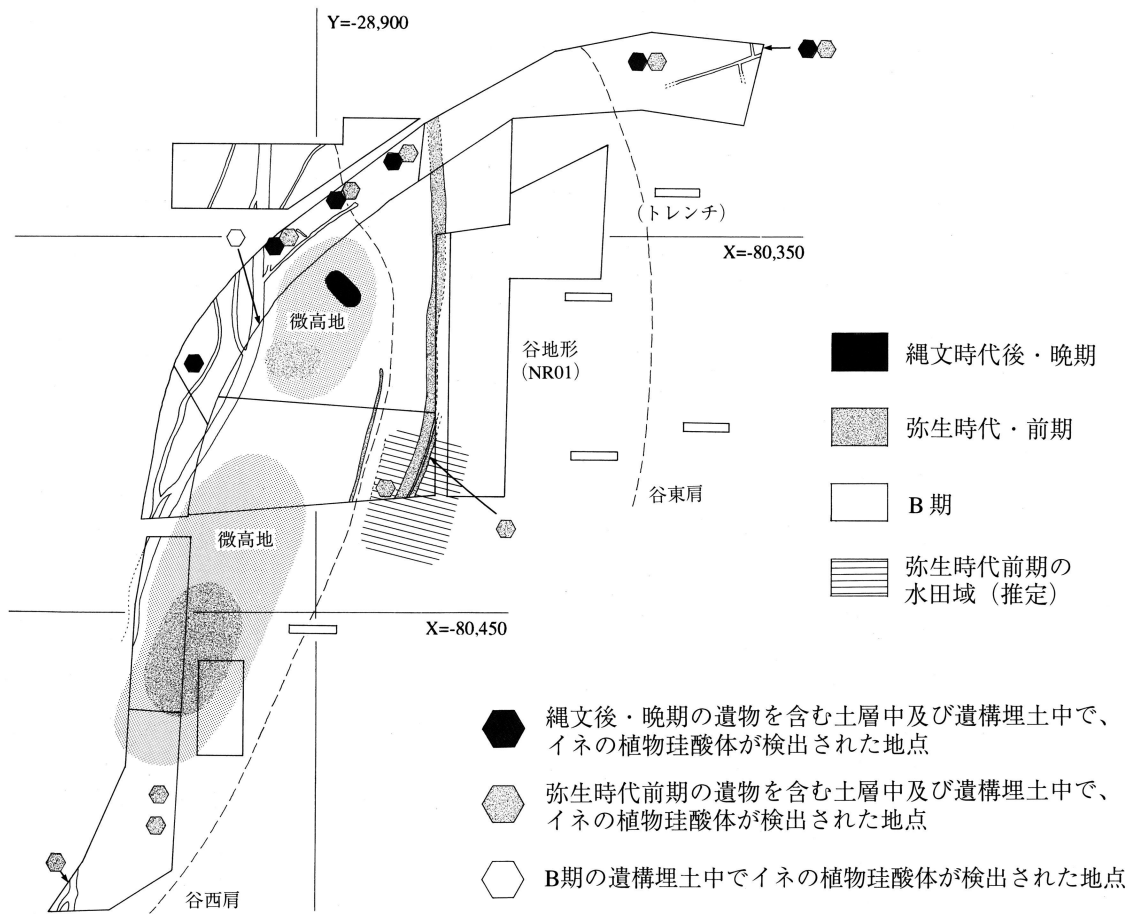
調査の概要 三ツ井遺跡は、昨年度からの調査によって縄文時代後期後葉から中世（鎌倉・室町時代）へと続く複合遺跡であることが明らかとなった。

検出された遺構・遺物は、大きくA期：縄文時代後・晩期～弥生時代前期、B期：弥生時代前期～古墳時代前期の間、C期：古墳時代前期～古代（奈良・平安時代）、D期：中世（鎌倉・室町時代）の4時期に区分できる。

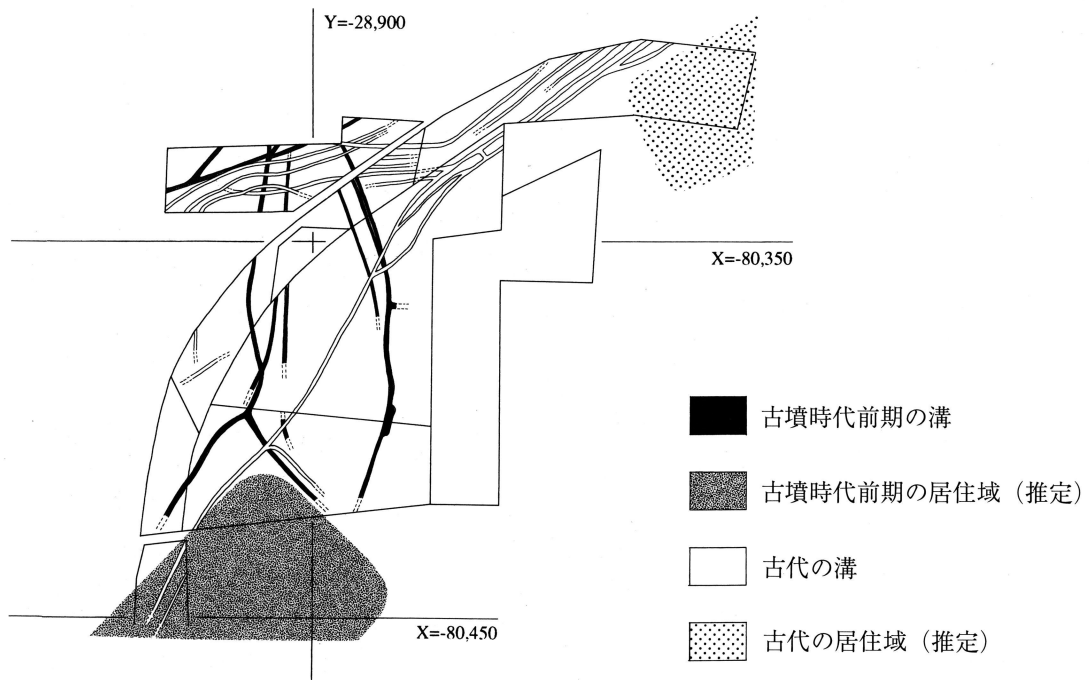
本年度の調査成果としては、縄文時代後・晩期から弥生時代前期の土器・石器が多く出土したこと、弥生時代前期の溝の盛土部分から遠賀川系の壺・蓋が埋設された状態で出土し、水田址の可能性が考えられること、中世の島畑が形成される以前に墓域を想定させる遺構が確認されたことなどがあげられる。



第1図 調査区位置図 (1:2500)



第2図 A・B期遺構図 (1:2000)



第3図 C期遺構図 (1:2000)

A 期 縄文時代後期後葉から晩期前葉の遺構としては、自然流路（NR01）西側の微高地上で土坑などが若干検出された。主な遺物としては、石鏃・石錘・石皿・敲石・砥石・蛇紋岩製の磨製石斧・サヌカイト製のスクレーパーなどの石器類、後期後葉の深鉢（北白川上層式期に並行）・晩期前葉の浅鉢・深鉢などがあげられる。また、NR01の西肩付近で一辺20cm・長さ60cm程の直方体を呈する巨石が出土している。その後、河川の流れに変化が生じ、幅約80m、高低差約1mの谷地形が形成され、地形全体に黒色粘土層（¹⁴C年代測定結果によると、96B区の微高地上でB.C.775年、低湿地部でB.C.890年の暦年代値を得た）が段階的に堆積したと考えられる。昨年度の調査では、この層からイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が多量に検出されたことなどから、付近で稲作が行なわれた可能性が高まったが、現段階では、明確な水田遺構は検出されていない。

弥生時代前期の遺構としては、谷地形の低湿地部で、南北方向に走り、盛土を伴う幅3m・深さ40cm程の溝（SD92）が検出され、その盛土中より埋設された可能性のある遠賀川系の壺・蓋が出土した。また、SD92に直交する盛土痕がSD47内で検出された。盛土を畦畔として想定すると、溝は水田用水路と考えられる。さらにSD47の盛土中と水田床土と推定される土層中からイネの植物珪酸体が確認され、近辺から収穫具と考えられる粗製剥片石器（光沢あり）も数点出土していることなどから、水田址の可能性が考えられる。この時期の居住域は、谷地形西側の微高地上に展開し、その中心地は昨年度の調査から96C区の東側付近と推定される。97B区でも竪穴住居2棟（SB01・02）や石皿・敲石などの石器類がセットで埋納された土坑2基（SK171・172）などが検出された。また、近辺から下呂石・チャートなどの剥片・原石が多く出土し、石器製作の場が想定される。A期の遺構は、洪水による浸食によってその存在をわずかに窺い知ることしかできない。

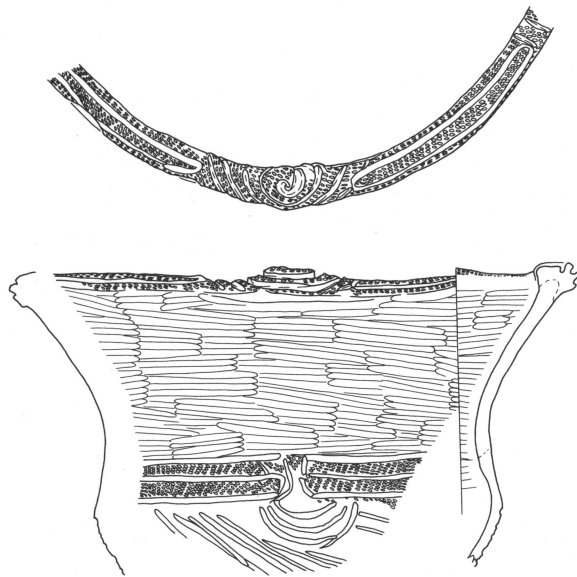
B 期 弥生時代前期から古墳時代前期の間と考えられる時期に、再びNR01の活動が活発化し、稲作は微高地西側の縁辺部で展開するようになったと推定される。幅3m・深さ1m程の大溝（SD93）は、盛土を伴い、溝埋土中からイネの植物珪酸体が確認されたことから、水田用水路として利用された可能性が考えられる。大溝から分岐・合流する溝群にも盛土がみられたが、水田域は不明であり、この時期の居住域も不明である。時期決定可能な遺物がないたため、明確な時期は不明であるが、層位から判断してこの時期の遺構とした。



97B区 谷地形セクション



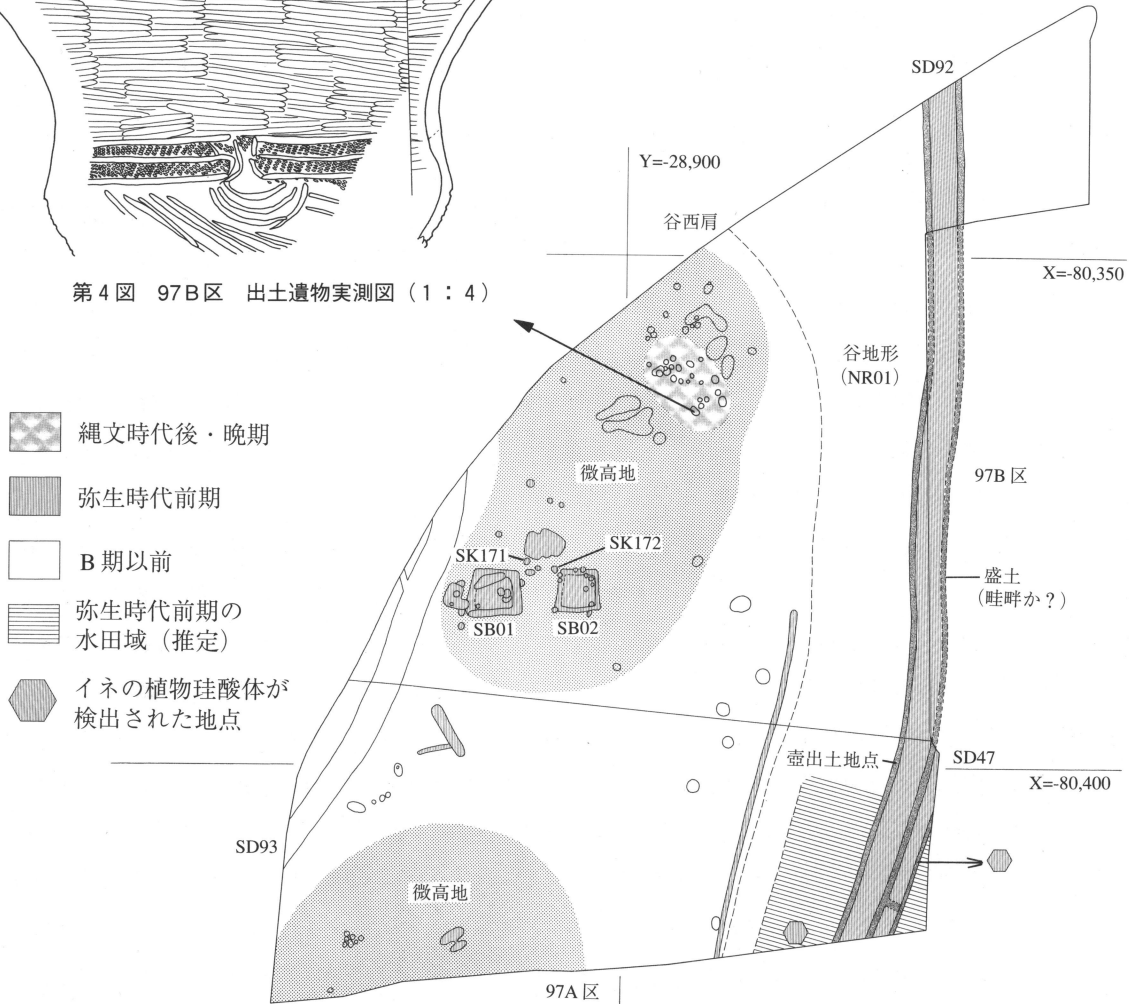
97B区 SK171・172遺物出土状況



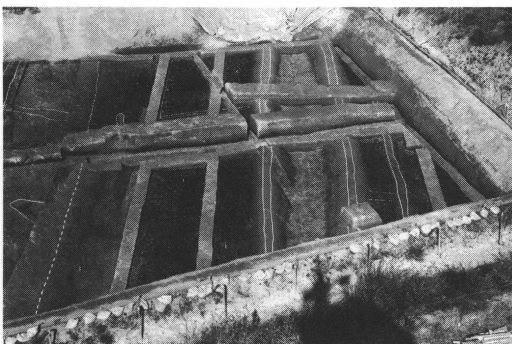
第4図 97B区 出土遺物実測図(1:4)



97B区 巨石出土状況



第5図 A・B期遺構図(1:750)



97A区 SD92・47完掘状況



97A区 SD92西側盛土内壺・蓋出土状況

C 期 古墳時代前期までに、大規模な洪水性の堆積によって谷地形は埋没し、現地形にほぼ近い平坦な地形になったと推定される。古墳時代前期の遺構としては、微高地の縁辺に沿う方向に走る溝群（S D18・30）や、小型丸底壺を出土した土坑（S K88）などを検出した。この時期の居住域は、97 A区南側から96 C区東側付近と推定される。主な遺物としては、甕類（S字状口縁台付甕など）・壺類（二重口縁壺・パレス壺など）・高杯・甌などが出土した。廻間Ⅲ式～松河戸Ⅰ式の時期と考えられるものが多いが、廻間Ⅰ式・Ⅱ式の時期のものや古墳時代後期（5世紀末）と考えられる須恵器の杯身なども若干出土した。

古代の遺構としては、溝群の検出が主であり、概ね北東から南西方向に走る溝群と東西方向に走る溝群とに分けられる。溝は残存良好な所で幅 1 m・深さ70cm程を測り、8世紀後半～9世紀後半の時期と考えられる。昨年度の96 A区で、溝群の南側で竈を備えた竪穴住居を数棟検出したことから、居住域に関連したものであると推定している。主な遺物としては、猿投窯編年によるとO-10～K-90の時期と考えられる須恵器の杯身・杯蓋や灰釉陶器の椀・皿・段皿が多く出土した。他に、土師器の甕、ガラス製小玉、8世紀前葉と考えられる美濃須衛窯産の須恵器の椀（佐波理鏡写しで、刻印あり）なども出土した。

C期の溝群は、その走る方向に規則性があり、何度も掘削し直され再利用されたものが多く、古墳・古代包含層がよく残存する所で交錯している。

D 期 今年度の調査によって、島畑が形成される以前の遺構が検出され、中世が2時期に区分されることが確認された。また、後世の耕地開発のためか、遺構がかなり削平されていた。

12世紀末～14世紀前半の鎌倉時代の遺構としては、97 A区でC期の溝の軸線と同方向の畝状遺構と考えられる溝群を検出した。また、方形土壇や集石など墓域を想定させる遺構群を検出した。96 B区から97 B区にかけて、隅丸長方形に掘削された凹地内で柱穴と考えられる土坑と溝群を、その東側と南側で区画溝群を検出した。出土遺物・柱穴数が多いことから、居住域とは考え難く、墓域と関連した特殊空間の可能性も考えられる。

14世紀後半の室町時代になると、水がかりの悪いこの地域では、水田開発に伴い、水田と畑地を共に利用する集約的な島畑の景観が形成されるようになる。これらに伴う遺構群は、概ね東西・南北方向を維持しており、条里の軸線に規制されたものと考えられる。

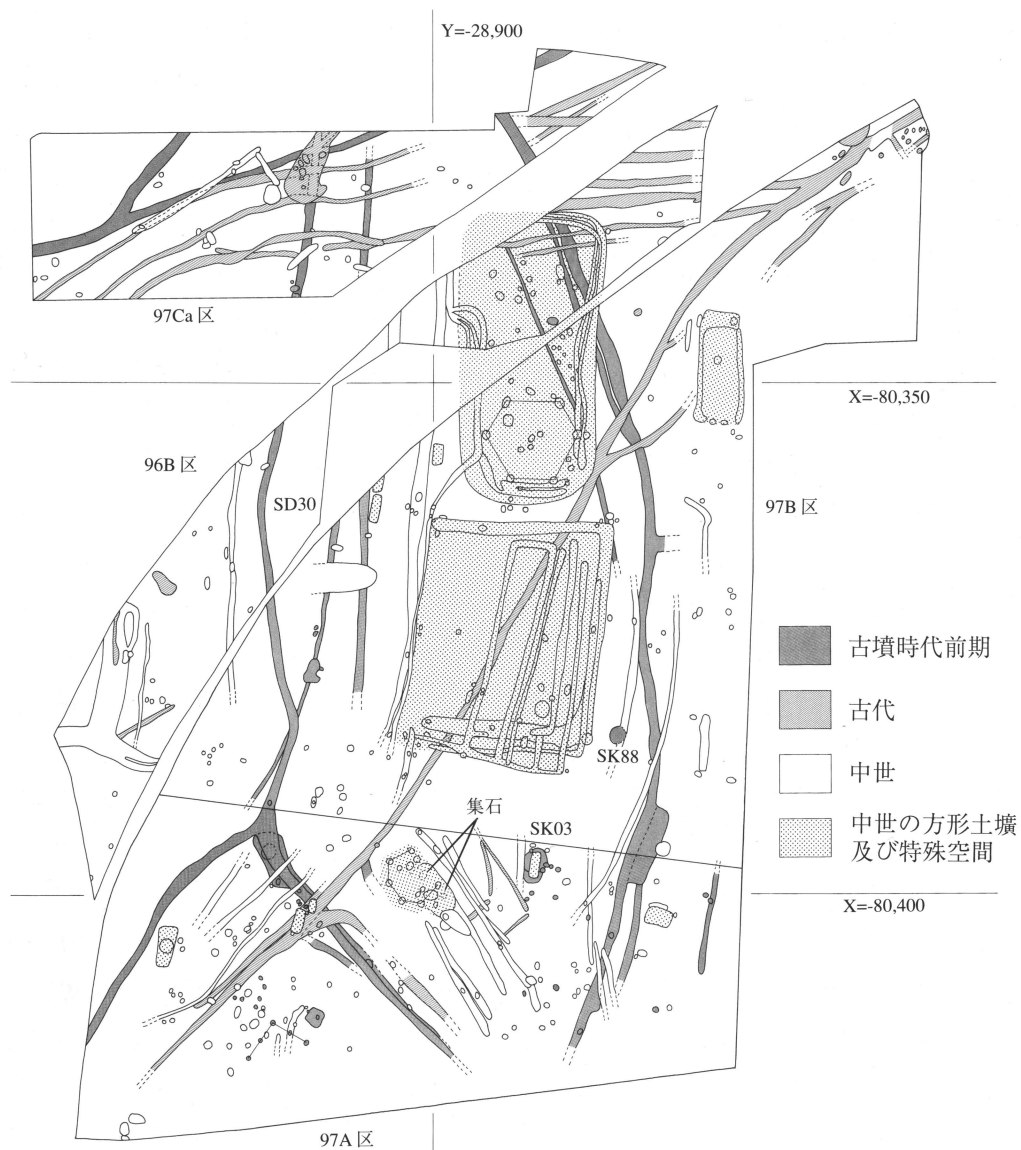
（大崎正敬・山本寿徳・田中伸明）



97 A区 S D30完掘状況



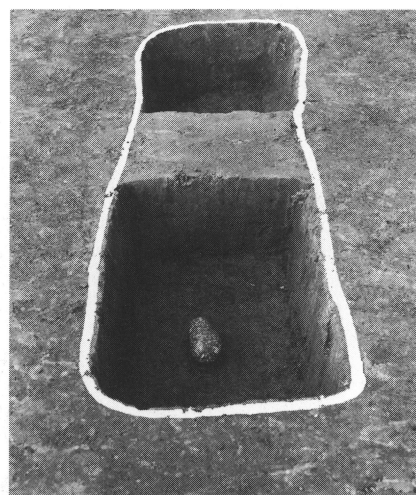
97 B区 S K88遺物出土状況



第6図 C・D期遺構図 (1:750)



97B区 区画溝群



97A区 方形土壇 (SK03)